九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

1920年代上海における学校衛生をめぐる研究の課題と動向

徐，佳汝
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻 ： 博士後期課程（教育哲学）

https://doi.org/10.15017/6769070

出版情報：教育基礎学研究. 18, pp.53-63, 2021-03-25. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

教育基礎学研究，2020，第18号，53－63頁
Bull. Phil. & Hist. of Education, Kyushu U., 2020, Vol.18, pp.53-63

1920年代上海における学校衛生をめぐる研究の課題と動向

徐　　佳　汝

はじめに

本稿は中国の近代公衆衛生史及び学校衛生の歴史に関する研究を整理する上で、1920年代前後の公衆衛生の確立や個人衛生の教化についての諸研究の成果と意義を確認し、上海の学校衛生をめぐる今後の課題を探る。

第一章では、ルス・ロガスキの研究『衛生的近代（*Hygienic Modernity*）』[1]を主な対象としてレビューを行う。中国における近代衛生の成立に関する歴史研究において、ロガスキの影響を抜きにして考えることはできない。ロガスキは「衛生的近代」（Hygienic Modernity）という概念を提示し、かつては「養生」とほぼ同義に使われていた「衛生」が、徐々に国家権力、科学規範の制定、身体の清潔および人種の適性と結び付けられるようになっていく「近代的」なプロセスを内包しているという。この概念の影響の下で展開されてきた、近代中国の公衆衛生を主題として扱った研究の動向を追う。

第二章では、上海の公衆衛生行政の成立と展開を解明した福士由紀の研究を軸に、上海に注目する意義と、そこで行われた公衆衛生事業における個人衛生の教化に関して明らかにされた内容を考察する。福士は、19世紀末から20世紀半ばまでの上海に着目し、伝染病への対応における国家や行政の役割の拡大を解明した。この「拡大化」をめぐる議論を踏まえ、伝染病の流行に対する、上海社会の人々による日常生活での措置や態度について福士の議論を検討する。

第三章では、福士、S.Foster、また C.Nakajima 等による、上海の学校衛生に関する研究成果についてレビューする。個人衛生教化についての議論を受けて、なぜ学校衛生に着目する必要があるのか、学校衛生教育の衛生行政や社会衛生運動の位置づけを考察する。

第一章　衛生的近代（Hygienic Modernity）の成立

第一節　「養生」（yangsheng）から「衛生」（hygiene）へ

19世紀半ばから20世紀半ばという時期に衛生をめぐる関心が「個人養生」から「個人教化」へと移った経緯は、天津における中国人エリートたちによる翻訳や雑誌刊行、衛生宣伝活動に関するロガスキの考察に詳しい。『荘子』で主張されている「養生論」、つまり食べ物の食べ方、睡眠時間などの日常の振舞いの規範や心を乱されずに身体内部の

「気」を把握することは徐々に姿を消していった。その代わりに、中国人エリートたちは「衛生」を、病気から個人や社会集団を予防するための手段・戦略と見なしており、「衛生」は近代国家の条件であったという意識が高揚した。ロガスキが言うように、これは、「生きるという現実は部分的に知の管理と権力の介入の場へと移る」というフーコーの理論[2]と合致している。

同時にロガスキが強調しているのは、中国近代衛生の成立において日本が果たした重要な役割である。翻訳や留学、また日本人による軍医学校の開設と天津租界での衛生管理を通して、当時の中国人エリートたちは日本の衛生思想を受け容れ、特に警察・病院の設置、衛生制度の設立には日本のモデルを採用した。山室信一が示した「学知の回りと国民国家形成」の関係のように、西洋世界は、国際秩序に非西洋世界を組み込んでいく最低基準として、自らの生活・生産様式に合致した政治社会のあり方を文明国標準として設定した一方、アジア諸国の国民国家形成は、異なる政治社会間の相互交渉、そして相互規定の所産として生成され、諸政治社会間の関係性の中に強制や抵抗を伴いつつ、競合の結果として生み出されてくるのである[3]。ロガスキの研究において、日本はまさに中国と西洋間の思想流通のための橋渡しのような位置づけである。

以上のような視座の上で、衛生の意味の変化に注目することで「衛生的近代」と個人衛生教化の関係について精査したのが、雷祥麟の研究[4]である。雷の論文では、1910年代から30年代までの中国において、元々日本から輸入された「衛生」という概念が、中国医学の価値観を保留しながら、西洋医学の細菌学や解剖学等の学説を吸収したことが指摘されている。この衛生観念の形成・変化の過程を、雷は中西医学論争に注目して解明している。民衆たちにそもそも「抵抗感」があった西洋の衛生・医学知識を教え込み、受容させるため、西洋医学を中医の理論で再解釈することや、西洋式の生活習慣を中国の二十四節気と結び付けることなどが行われた。また西洋の雑誌で書かれた化学の元素を中国語に翻訳した時に、中国家庭でよく使われる日常用語に変換した（例えば：お酒の C2H5OH →醸毒）。こうして西洋医学の知識や観念との融合・再編によって、中国地元の衛生をめぐる価値観や生活習慣が刷新され、新たな「中国式の衛生」が形成されたと指摘されている。雷の研究は、近代中国社会における衛生の意味合いの変換及び新たな「中国式の衛生」の誕生にとっての日本型の西洋医学の機能を明らかにした。それはアジアにおける「植民地支配」にとって重要な手段であったのみならず、中国人エリートによる西洋医学の受容、また民衆たちによる個人衛生への重視の喚起を促した重要な媒介でもある[5]。

以上のようにロガスキは、天津に重点を置きながら、租界と中国社会によって展開された公衆衛生事業の相互作用をめぐる分析を通して、近代化推進の過程において、「衛生」という言葉の意味するものが、徐々に「生命（気）を守る（guarding life）」という経験知としての養生術から、「清潔」「習慣」「階層」、さらに「病原」「細菌」を除去する

という言葉などを包含する意味合いへと転換していったことを明らかにした。ロガスキはこの転換を「衛生的近代」と表現している。この「衛生」という用語の意味変換を見ることで、ロガスキは、中国人エリートや行政官が西洋人の目線を重視し西洋の医療規範を導入しつつ、国民に西洋医学を受容させるため工夫したことを解明できただけでなく、衛生的近代な国家を構築する過程に、個人の衛生教化が重要視され、国家建設に多大な意味を持つようになったことも明らかにした。

第二節　公衆衛生と個人衛生

こうして「衛生」という言葉が、20世紀前半になると「公衆衛生」(public health) と「個人衛生」(personal hygiene) という二つの意味を帯びるようになってきたとロガスキは指摘している。ロガスキによると、「個人衛生」が「清潔」「習慣」に関する個人教化と関わっている一方、「公衆衛生」は土地の清潔や病院・上下水道の設置などの人間生活の利害に連なるすべてを網羅する国家機関の設立とその事業である。このような転換の中で、中国人エリートたち、行政家や医師たちは、西洋医学を導入しつつ、中国の状況に適合するように改革しながら、国民全体を衛生システムの中に組み込もうとしていた。すなわち、「衛生」を通して、個人の衛生教化は緊密に国家の建設と結びついてきた[6]。

公衆衛生と個人衛生については、列強諸国の進出による「身体の植民地化」と「民族の防衛」を課題として論じた飯島渉の研究がある。飯島は、「医療社会史」という視点から、衛生の制度化と植民地近代化という文脈における近代中国の衛生事業の展開を分析している。その中では、衛生をめぐる国家や社会のあり方、個人との関係性が論じられているが、中国側の立場や反応が強調されており、20世紀の中国における衛生の成り立ちは、近代性の強制に対する受容と抵抗を通じての衛生をめぐる制度や観念の共有の過程であったと飯島は結論づけている[7]。

飯島の研究では、ロガスキと同じように行政機構、関係法令、人材のいずれの面でも日本の公衆衛生行政制度をモデルとしていたことが述べられている一方、日本やロシアといった列強諸国の東北部への進出の中で、衛生問題、特に防疫問題のコントロールが中国の主権問題の一つとして認識されたことが強調されている。東北防疫処・海港検疫処の設立により、外国からの中国主権への干渉に対する抵抗、また、欧米や日本といった列強諸国による中国（占領地や租界）での公衆衛生行政の展開を詳述し、民間レベルで行われていた各種の衛生事業の権力機構への中国側の政府による再編に重点を置いている。つまり飯島は行政・主権問題や植民地医学に着眼することで、国家の公衆衛生への介入を強調しつつ、個人衛生を国家による国民個々人の管理の手段として位置付けている。

それに対してロガスキは、天津における多数の植民地「支配者」と「被支配者」間の

協力と抵抗を見ているが、衛生を通した中国側の行政管理や、列強進出・租界統治に対する反応というより、衛生的近代が進んでいくとともに、西洋や日本と接触して衛生観念・技術の刷新によってもたらされた個人衛生教化への重視に注目している。ロガスキは当時天津地方で最も主要な新聞紙 ── 『大公報』や、租界と中華政府の公文書・報告書、広告また中国人医者の著作などを用いて、行政家や医師たちが、「衛生」という「文明の要素」を「無知」な民衆に拡散し、吸収させていく姿を明らかにした。これらの史料を通して、ロガスキは、中国最初の市立西洋医病院であった北洋医学院や袁世凱政府の衛生局をはじめとする政府主導の衛生行政の成立だけではなく、中国人エリートたちの態度や反応、及び民衆の日常生活への衛生観念の浸透過程を解明した。国家の衛生は公衆衛生にとって最も重要なことであるというスローガンの下、中国側のエリートたちが「国家の基盤」である民衆を教化するための主要手段であるという健康や衛生の意義が明らかとされたのである。

この公衆衛生と個人衛生の関わりについて、個人衛生が、民衆と国家の直接的な繋がりを固める橋渡しとしての意味を持っていたことは雷も触れている[8]。雷はロガスキの「衛生的近代」(Hygienic Modernity) という概念をベースにし、アジアの「衛生の近代化」は、個々人の身体・健康保護をめぐる西洋の「衛生 (hygiene)」という概念を超えているという。すなわち近代中国における医療・衛生事業の展開を「身体の保護」から「民族の防衛」への変化の過程として論じた。雷はロガスキの議論を踏まえ、前節で述べたような新しく生まれた近代的な衛生観念が、当時の社会における個人衛生・家庭衛生習慣の養成、及び国家と民衆の関係に影響をもたらしたことを加えた。特に育児をめぐる議論は、中国の伝統的な人格育成などの道徳的な側面から、新たな西洋医学を基準とした健康・衛生の知識へ移行するようになった。これに関して、子どもの健康状況が数値で統計され、可視化されるようになったため、学校でも家庭でも管理しやすいものとなり、大人、特に親に対する衛生上の要求が厳しくなってきたことを雷は挙げている。このように、社会の中で「愚昧」で「不潔」な親を「啓蒙」するという課題が生まれることになり、個々人の衛生重視によってもたらされた国民と国家の緊密的な関係が、子どもの健康・児童衛生への重視を導いたことを解明したことが、雷の独創点である。

第二章　上海の衛生事業をめぐる検討

第二章では、中国の衛生史研究において、上海地域に焦点をあてる意味と、従来の研究成果をレビューする。

第一節　中国から上海へ

地方の公衆衛生行政史について、これまでは中国や各国の新聞報道、民間団体の出版物、行政機関の議事録や報告書などを駆使し、具体的な地域の衛生状況や伝染病に対応

する衛生事業・医療対策を論じる研究がなされてきた。その中で取り上げるべきは、福士由紀の上海をめぐる研究である。清末期から1950年代までの上海衛生制度史に関する福士の研究が、上海を研究対象とするのは、二つの大きな租界を有したことと、国内外の交通の要衝であったことによる[9]。このような特徴を有している上海においては、知識人（医者や行政官僚など）が留学して触れた欧米の衛生知識や事業、医療宣教師の流入によってもたらされた新たな衛生思想・観念が、国内の諸要素と絡み合って再編されることで上海の都市衛生事業が展開する。これが、福士が上海に注目する理由である。つまり福士は上海を「近代中国の置かれた状況の縮図」[10]として位置づけ、上海内部の外国勢力の勃発と外部との緊密な関わりを上海公衆衛生を考える時の重要な要素として提示している。

また上記の山室の研究で示されているように、国民国家形成を進めるための思想や制度の欧米から中国への直接的受容という経路は、雑誌などの印刷メディア、留学、お雇い外国人医師、宣教団体等を主要なものとして挙げることができる[11]。これは中国、特に上海の公衆衛生が成立したプロセスにも見られる。福士によれば、当時の上海においては聖書等の文書の配布と学校の設立による知識普及という伝道の方法、また医療・慈善活動を通しての社会への浸透という方式があり、留学生の派遣などの中国自身における西学受容の試みとともに、宣教師たちによる積極的な中国への西学普及のための努力もあった。こうした書籍・雑誌の発行、学校教育の実施、学術講演会の開催などは西洋人の活動が多く行われた上海で盛んであったため、上海に焦点をあてると、中国と日本、また西洋の間にできた衛生思想・学知の流通の回路を解明できるだろう。

第二節　上海における衛生事業からみる民衆教化

なかでも福士による研究は、衛生行政機関であった上海特別市衛生局（華界）と租界による衛生事業の展開過程を明らかにした。民衆への教化は、華界と租界の間における相互の影響に伴い進展されてきた。

福士によると、南京国民政府下の上海特別市政府のもとでは、個々人の健康・衛生が、中国の強国化につながるとする「衛生強国」論を基礎として、各種の公衆衛生事業が実施されたが、各種事業において行政側による民衆の教化の重視という特徴が見られた。20世紀に入ると、反帝国主義運動の高まりの中で、政府公報や民間団体の雑誌、新聞紙などを通して、国内の衛生行政の改善が求められ、西洋医学や医療制度の導入を目指した留学生・知識人、医療専門家をメンバーとした民間団体と行政機関が結成された経緯が解明されている。ここで福士が強調しているのは、とりわけ衛生行政の一環としての、一般民衆に対する衛生観念を注入する衛生教育である。当時個々人の衛生を都市、国家の衛生へと接続させるという理念の下、上海特別市衛生局は、ビラや広告、小冊子の出版、講演会の開催の他、衛生運動・衛生キャンペーンによる衛生教育も行っていた。こ

のように、上海特別市衛生局による衛生行政は、それ以前の衛生行政と比べて、より広範なものであり、民衆生活へも大きく関与するものでもあった、と福士は指摘している[12]。

一方で、租界当局（工部局）による公衆衛生行政は組織的に、かつ強制力を以て行われたが、中国人民衆の習慣や生活に干渉するものであったため、中国社会からの反発を招くものとなったという。1910年から11年間の腺ペストの流行の様相、ペスト対策をめぐる租界当局と中国人社会（華界）の衝突が華界 ― 租界の衛生行政に及ぼした影響を解明した福士は、租界衛生行政と中国人社会や華界との関係を言及し、租界衛生行政は華界にとって、時にはモデルとして、時には中国民衆に「恐怖感」を与えるもの、つまり抵抗すべきものとして認識されていたことを指摘した。福士は、当時の代表的な新聞紙の一つであった『時報』に掲載された民衆の暴動記事を列挙し、ペスト騒動における民衆抵抗の様子を明らかにしている。租界工部局による諸措置が比較的強圧的に行われたこと、また感染防止のための閉鎖的空間での、中国の医法と異なる厳格な隔離や、外国人医師によって行われる馴染みの無い検査に、中国の民衆は恐怖感・忌避感を覚えた。これは、とりわけ女性の間で強いと指摘されており、子どもの衛生にも影響を与えていたという。福士によれば、伝統的な中国社会においては、家族の系統を継続させることが重視されているので、子どもは重要であった。そのため、誘拐等子どもに危害が加えられることを防ごうという集団的心理が働いていたことが考えられる。工部局が、お金の給付や接種種痘宣伝活動などを行うことで、中国民衆に馴染みよい児童の接種種痘事業を展開した要因もここにある[13]。

以上のように、福士は、民衆、特に女性の個人衛生問題について、上海ペスト騒動の際の民衆や女性の暴行とその背景を検討し、20世紀はじめの上海における医療・衛生と民衆社会との関わり、及び西洋医学に対抗する過程における人々の医療や健康に対する習慣・観念の形成を解明した。租界工部局による強制的な管理に対して、受容にせよ抵抗にせよ、女性、特に母親が子どもの接種や衛生習慣・観念に大きな影響を及ぼしたため、女性の衛生教化役割の重要性を指摘したのである。福士は、中国において公衆衛生が構築されてきたプロセスの中に、西洋医学との結合あるいは抵抗により、衛生行政化が進み、新たな衛生観念が形成された動きを明らかにした。この動きを通して、植民地宗主国の論理がそれぞれの植民地的な社会の文脈とどのように交錯したかが明らかとなった。

以上のように福士は、19世紀後半から20世紀半ばまでの国際貿易都市としての上海、特にその中国と西洋との接触点である租界に注目し、衛生事業に関わる様々な主体や、その活動実態の検討を通して、衛生事業を介して見た地域社会の変容などを考察してきた。特に租界と華界それぞれの衛生行政機関の成立経緯に関する解明には、研究の意義を見出すことができる。以上の華界と租界の各自の衛生行政機関の設立をめぐる福士に

よる解明は、公衆衛生行政の整備において租界は華界にとって参照されるべき存在であると同時に、抵抗すべき存在でもあったことを示唆している[14]。こうして福士は、外国社会と中国社会への相互影響を検討したことで意義を見せている。

第三節　個人衛生への重視

前節でみたように福士は、公衆衛生制度・行政という近代的制度・システムの上海社会への導入と受容の大きな流れを見ることで、身体的な側面での国家—社会—個人間のつながりを捉えることができた。しかし、個人衛生への関心と民衆教化に基づく学校における衛生教育に関しては、衛生局の事業の一環であったことを論じているのみである。

第三章　学校衛生への着目

第三章では、前章までで整理した国民衛生教化の重要性という視点の上に、「将来の国民」として位置付けられた子どもの重要性、さらに子どもに知識を教え込む場所として重要視された学校と、そこで着手された学校衛生教育に関する研究を整理する。

第一節　公衆衛生の一環としての学校衛生の重要性

上海の学校衛生教育に関しては、福士は上海の衛生行政化のプロセスを解明するために、上海特別市衛生局の活動を述べる時に、「学校衛生」は上海特別市衛生局の諸衛生事業の一環として位置付けられている。上海における衛生事業展開の背景を解明した際に福士が既に示していたように、1920年代後半から、「国家の盛衰は、人民の強弱によって測られ、人民は強健であるかどうかは公衆衛生による」という南京国民政府の「衛生救国」「衛生強国」という思潮の下、公衆衛生と国家の盛衰とは大きな関係があると、当時の衛生官僚や中国人の医学専門家によって強調された。「子どもの健康」と国力を結び付けたように、「国民の基盤」「将来の国民」として位置づけられていた子どもの心身健康は当時の公衆衛生にとって重要な課題であったという。個々人の衛生習慣を管理し、「強い国民」を育成し、さらに国家の経済や生産力を増やし、国勢を増強していく目標を達成しようとした衛生局は学校衛生教育をその事業の一環として捉えたことが明らかとなった[15]。

福士は国家建設と国民作りの視点から、衛生当局による衛生事業の一環として学校衛生教育を上海の公衆衛生史に位置付けていた。それだけではなく、衛生局による学校衛生事業の展開も確認した。福士は「学校衛生は重要視されており、国立・市立学校の児童・学生に対する健康診断、体格検査、強制的な予防接種が行われ、これは後に政府に登記された私立学校にも適用された」と指摘し、衛生検査や学生への体格検査、講演、戸別訪問などの事業は、衛生局によって年々強化されていたという。つまり福士が論じ

ているのは、学校衛生教育の内容であり、その構築過程や現場における実施実態については未解明である。

また、姜靖は、近代中国における「手」の崇拝と「清潔」観念をめぐって議論を行う時、社会の価値観やモラルの角度から学校衛生教育の必要性を述べている。姜は蕭紅[16]の小説『手（*Hands*）』[17]に出てくる人物を描写し、小説の主人公であった女学生が、「手が汚い」ために先生と生徒たちに排除されたことを描くことで、当時の清潔とモラルの関係を説いている。その時の社会において、「不清潔」が人のモラル上の失敗や、不道徳とつながっていることを姜は示している[18]。この社会風潮の下、学校で衛生教育を実施したが、主人公のような労働者階層の子どもが衛生教育の場から排除されたことは姜によって明らかにされた。このように、姜は蕭紅の小説『手』を分析することで、当時社会の「清潔」とモラルが結びついたという理念の下、必要とされた学校衛生教育の実施現場における階層分化を明らかにした。しかし、こうした価値観や観念の形成が社会の雰囲気となったことに伴う個人衛生の教化、特に子どもへの衛生上の指導や、家庭における母親の役割、また学校の役割が重要視されるようになったことについて、姜は触れていない。

また、上海特別市における学校衛生教育の展開については、上海の衛生模範区を特定し、衛生模範区の設立とその活動を考察した際にそこの学校衛生教育を見たS.Fosterの研究[19]が挙げられるだろう。Fosterは、中国の広州・上海・長沙三つの都市を研究対象とし、医学学校の設立経緯や、事業展開、人員配置などを見ることで、西洋の医学知識と実践が中国に移入された過程を明らかにした。その中で、上海医学院と上海特別市衛生局が合同して設立した呉淞衛生模範区の一つの活動として上海の学校衛生教育を位置づけている。Fosterは、呉淞衛生模範区の衛生事務所は、医療活動、衛生教育、町の掃除や肉類の検査を含む公衆衛生、母子衛生、工場・学校衛生などを管理・監督するという衛生当局の事業を列挙している。学校衛生は模範区の事業であったことがわかるが、区内の学校における学校衛生事業が着手され実施されていく様相は明確ではない。

さらに、第一章で、衛生の専門家や医学行政官僚は民衆に西洋の衛生観念・知識を受け入れさせるため、中国の医学文化や価値観と融合する形で教え込んでいたことについての研究に触れた。こうした普及・宣伝の方法はいかなるものであったのかということについて、政府当局が個人衛生慣習や家庭生活の改善のため衛生キャンペーンをどのように工夫してきたかを目的としたNakajimaの研究がある。Nakajimaは1920～1930年代上海で開催された衛生キャンペーンに着目し、「強い中国」を建設するために、上海特別市衛生局は西洋の衛生観念・知識を受容しつつ、衛生キャンペーンで民衆を普及することで、伝染病の撲滅や個人の衛生習慣・市民の住居環境の改善を目指していたと論じている。Nakajimaは新聞報道や政府年次報告書を用い、衛生行政官僚と警察が使った幻灯、図絵、衛生用品の展覧会などの方法を見たが、その中に学校の教員が衛生に関連す

る講演を行うことや、学生たちがキャンペーンに参加すること、及びキャンペーン実施を通して身につけたものを実際の生活で活用することをNakajimaはキャンペーンの一つの意義として強調している。Nakajimaの研究は、学校現場における衛生教育の実施というより、社会の衛生キャンペーンへの参加によって教員や学生が衛生知識を民衆に浸透する一つの媒介になったこと、つまり学校衛生教育の社会での知識を普及する役割に重点を置いた[20]。Nakajimaは、教員や学生による衛生キャンペーンの参加を通して、社会衛生運動の文脈において、民衆個々人までの衛生知識の浸透を促した学校衛生の機能を解明した。

第二節　学校衛生をめぐる今後の課題

以上の研究を見れば、学校衛生事業は、衛生当局の諸事業の一つとして着手され展開されていくことは明らかとなっている。しかし、いずれの研究においても、児童健康や学校衛生教育は主題として挙げられていない。先行研究は学校衛生事業が推進されたことを解明したが、個人衛生教化が重要視されていた当時の中国社会では、学校の役割と機能、つまり国家による個人衛生教化の実施に、学校衛生教育はいかに組み込まれていたかということは欠落している。従って、上海特別市の公衆衛生事業が進められるなかで、学校衛生事業の展開の実際、例えば学校の校庭や教室の環境、教室で使われる机や椅子などの用具の整備などの子どもの衛生環境の管理といった学校衛生事業が着手され実施されていく様相を明らかにする必要がある。また学校衛生教育と親（母親）との関わり、家庭衛生教育や母子衛生など、国家による学校や家庭を通した個人衛生の管理の具体的経緯が解明されなければならない。というのは、ロガスキが言ったように、エリートたちは衛生思想をより一般の層にも押し広げようとするため、学校衛生と家庭衛生を結び付けることで、つまり学校での児童の「身体」そのものの把握を家庭へも流入していくことは大事だからである。さらに、近代国家建設のために、学校と国家の関係も看過されてはならない。今後上海の学校衛生教育を研究の対象としながら、個人・学校・国家の三者間の接触や関係の解明を課題とする。

おわりに

本稿は、中国の近代公衆衛生史及び学校衛生の歴史に関する研究成果を検討してきた。

第一章では、ロガスキと雷らの研究を考察した。彼らの研究によって、国家が近代的公衆衛生制度を導入しながら、疾病の治療、伝染病の予防、環境衛生の保全等の国民の衛生・健康問題への対応を行ったと同時に、中国民衆の日常生活習慣（特に医療現場のあり方や参与者に対する認識や衛生・療養・病気治療などの習慣）・文化に緊密に関わる形で再編したという「衛生的近代」の進展とともに、個人衛生教化の重要性を浮かび

上がらせた。ロガスキと雷は、こうした「衛生」の意味の転換を分析の軸に、その意味合いによってもたらされた近代中国社会の衛生に対する反応の変化、特に個人衛生教化の必要性と意義を明らかにした。

第二章では、福士の研究を整理した上で、研究対象であった上海に注目する意義、また上海における公衆衛生行政の成立をめぐる福士の研究成果を見てきた。福士は交通と租界という二つの角度から上海の特徴を捉え、また公衆衛生事業がどのように展開されたのかを明らかにした。その中に、個人衛生教化と学校衛生は事業の一環として位置付けられている。しかし、衛生教育の実態は福士の研究の重点ではない。

第三章では、学校衛生教育に絞ってそれについての研究を検討した。今まで上海学校衛生教育に関する研究は、管見の限り少ないが、学校衛生教育は国家と緊密に関わっており、公衆衛生事業の一つの部分であったこと、また上海特別市衛生局によって展開されたことは既に論じられている。今後の課題として、学校衛生教育は民衆の衛生教化のためいかに機能したか、また学校現場の事業展開において「衛生的近代」はいかに進んできたかを検討していく。

以上のように、1920年代上海における学校衛生をめぐる研究の課題と動向を整理した。ロガスキによる「衛生的近代」という概念の提示は、近代中国の社会変容の背景に存在していた近代的要素の導入のあり方、その受容や実践のあり方を示し、近代国家建設のための公衆衛生事業進展の中に個人衛生の啓蒙・教化を位置付けようとする視角を提示している。その視角に基づき福士が解明した上海の公衆衛生行政の成立は、外国による衛生管理と、中国の国力向上と関わり、上海における個人衛生の教化が、諸外国勢力の複雑な絡み合いの下で衛生行政成立の重要な一環とされた。さらに、個人衛生教化の手段として、「将来の国民」を作るための学校衛生も公衆衛生事業の中で重要視され、上海特別市衛生局による学校衛生教育の展開や、社会衛生運動の中に学校衛生が組み込まれたことは、学校衛生に関する研究で解明された。しかし、本稿で検討した諸研究において、民衆、特に「国民の基盤」と見なされた子どもの意識・認識形成や、その形成を担った学校衛生教育の構築過程、また個人衛生教化のために学校の果たした機能などが不明瞭のままである。教育現場における学校衛生教育の実施を通して、西洋と中国の相互作用下の学校衛生像や、民衆の日常生活への学校の介入などが見られ、「衛生的近代」が発展した過程における教育の役割を考察することが可能となろう。

〔注〕

1．Ruth Rogaski, *Hygienic Modernity: Meaning of Health and Disease in Treaty-Port China* (Berkeley and L.A, California: University of California Press, 2004)

2．M. フーコー『性の歴史Ⅰ ── 知への意志』渡辺守章訳、新潮社、1986年、179-180頁

3．山室信一『思想課題としてのアジア：基軸・連鎖・投企』、岩波書店、2012年、17～20頁

4．雷祥麟（Sean Hsiang-lin Lei）：Moral Community of Weisheng: Contesting Hygiene in Republican China, *East Asian Science, Technology and Society: an International Journal*（2009）3: 475-504
5．雷、前掲文
6．ロガスキ、前掲書
7．飯島渉『20中国史：近代性の構造』東京大学出版会、2009年
8．雷、前掲文
9．福士由紀『近代上海と公衆衛生 ── 防疫の都市社会史 ── 』御茶の水書房、2010年
10. 福士、同上
11. 山室、前掲書
12. 福士、前掲書
13. 福士由紀「上海1910年 ── 暴れる民衆、逃げる女性 ── 」永島剛、市川智生、飯島渉編『衛生と近代：ペスト流行にみる東アジアの統治・医療・社会』、法政大学出版局、2017年
14. 福士、前掲書、2010年
15. 福士、前掲書、2010年
16. 蕭紅（1911年６月１日−1942年１月22日）、中国近現代女子作家。
17. 蕭紅『手（Hands)』、1936年
18. Jing Jiang, 'From Foot Fetish to Hand Fetish: Hygiene, Class, and the New Woman', *East Asia Cultures Critique*, Volume22, No.1, Winter 2014, pp.131-159
19. Shawn Xiaoyan-Lu Foster: *Transferring Western Medical Professional Institutions to China-Riding with Missions and Dismissing Native Medicine, 1807-1937: Guangzhou, Shanghai, and Changsha,* 2019
20. Chieko Nakajima: Health and Hygiene in Mass Mobilization: Hygiene Campaigns in Shanghai, 1920-1945（*Twentieth-Century China,* Volume34, Number1, 2008, pp.42-72）